

## 「対談」赤川次郎 x 高橋源一郎さん

『すばる』2015年8月号の「戦後70年企画」である。対談のタイトルは、「僕らが聞いた戦争は『数』でも『情報』でもない」だ。赤川次郎さんと高橋源一郎さんは、このレポートでも安保法をめぐる動きの中で何回か紹介してきた。印象に残る対談、発言だけでも紹介しておきたい。



(赤川) 今日はずいと言いたかったんですが、最近日本語がおかしいと思いませんか。「積極的平和主義」って何ですか。言葉をそこまでばかにしているのかと腹が立ちますね。

(高橋) あれはたしかに言葉がばかにされていますね。言葉に対するリスペクトがなくなって、非常に言葉遣いが粗雑というか、乱雑になってきています。

(赤川) 彼らが気楽に使う平和という言葉一つとっても、本質を隠すために使っているわけで、それは絶対許されないことだと思うんです。特に言葉を商売にしている我々からすると、ほんとうに腹が立ちますよね。

(赤川) 不思議という点では、日本というのは誰も責任を取らない国ですね。福島第一原発だって誰も責任を取らないまま、次の世代に渡していくのかと思うと。

(高橋) 失礼ですよ。あれだけとてつもない被害で国土を喪失したのに、責任を取った人が誰もいない。考えたら第二次世界大戦でも、何人かは死刑になりましたが、基本的には誰も責任を取っていないですよ。だからこの国は責任は取らないことがふつうになっている。

(赤川) そんな大規模な犯罪には責任を取らないのに、すごく小さなことでは大バッシングされて責任を問われる。AKB48の女の子が恋愛問題で頭を丸坊主にしたじゃないですか。あれ、すごく気持ち悪いなと思った。

(高橋) 異常な社会ですよ。丸刈りの頭を見たら、ナチスに協力したフランス女性への制裁を思い出しました。小さなことは徹底して暴かれ叩かれるけど、大きな事には見ぬふり。ゆがんでいますよね。言葉を扱っていくものとして、気持ち悪いことは気持ち悪いと言っておかないといけないですよ。

(赤川) 今の人は、昔より厳しい時代を生きているのかもしれませんがね。今の日本はある意味、戦争状態にあると僕も思います。生活保護を削ったり、打ち切ったりね。そんなもん削るなら防衛費削れよと僕は思うけど、今の若い人はいやおうなくそういう世界

に生きている。

(高橋) むしろ団塊の世代も含めて、豊かな経済の恩恵を受けた人たちのほうが戦場意識は薄いですね。もしかすると、今の 20 代、30 代のほうが戦争中の人たちの感覚をダイレクトにわかるかもしれない。僕は、そういうことが、来るべき社会を変えていく礎の一つになるんじゃないかという気がしているんです。

(赤川) その窓を開けるサポートを我々がしなくてはいけない。それがつないでいくということなんですね。

(高橋) ええ。親から受け継いだ戦後生まれの我々の記憶は、たぶんそういう若い人へのサポートで継承されていくのかなと思います

(2015 年 10 月 8 日)